

子貢像の變遷

宇野茂彦

〔一〕

孔子の弟子端木賜、字は子貢。『史記』仲尼弟子傳に依れば、孔門は孔子の生地魯の出身者が多い中で、子貢は鄰國衛の出身、孔子より少きこと三十一歳とある。⁽¹⁾一歳年長とされる顔回は、孔子が最も愛した賢弟子であるが、その顔回と比較されてゐて、子貢は顔回には及ばぬものの、顔回に次ぐ孔門の高足であつた。『論語』では子路について登場回数が多い人物であり、その性格はかなりよく表出されてゐる。⁽²⁾即ち、子貢は孔門で知の點ですぐれた弟子として描かれてをり、顔回は仁者にちかく、子路は勇者としての姿があるのと、よい對照をなしてゐる。(従つてこの三人の弟子のことはや行動についての記述を意味するなら、知仁勇、『中庸』にいふところの三達徳について、その具體的な映像をかかなりの程度讀みとることが出来るやうに思ふ。)

『論語』中に子貢の登場するのは、(章別は便宜上、朱子章句に従ふ)三十八章に及び多くは無論孔子との問答である。それは、君子について、或は政、友、士、爲仁、といった主題について問ふもの、また「貧而無詬、富而無驕、何如」とか、「鄉人皆好之、

何如」「有一言而以可終身行之者乎」「君子亦有惡乎」など好質問を提出するものであり知者としての面目を示してゐる。また、師の孔子を紹介したり讚美する條がある。例へば子罕篇の「大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也。子貢曰固天縱之將聖、又多能也。」とか、子張篇の叔孫武叔が孔子を毀つたのに對して、仲尼は日月の如き存在であるとたたへて、武叔をたしなめる話などである。

また、子貢の性質、人物について直接觸れる章がある。

A 子貢問曰、賜也何如、子曰、女器也、曰何器、曰瑚璉也。

B 子謂子貢曰、女與回也孰愈、對曰、賜也何敢望回、回也聞一以知十、賜也聞一以知二、子曰、弗如也吾與女弗如也

C 子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人、子曰、賜也非爾所及也。^(以上)(公冶長)

D 子曰、賜也達、於從政乎何有。(雍也)

E 言語、宰我、子貢。

F 閔子侍側、聞々如也、子路行行如也、冉有子貢侃侃如也、子樂。

G 子曰、回也其庶乎、屢空、賜不受命、而貨殖焉、億則屢中。^(以上)(先進)

H子貢方人、子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。

(憲問)

I叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼、……

(子張)

ABDの文からは、顔回には及ばぬものの、孔子から子貢は高く評價されてゐたことが分るし、Fの侃侃如は、剛直の貌か和樂の様かいつれにしろその活達な明るい性格を表したものであらう。Eは孔門の所謂四科十哲であるが、子貢が言語にすぐれることをいふ。CGHは、孔子があまり好まなかつたらしい子貢の性格である。孔子は巧言を嫌ひ、木訥を仁に近いといひ、多辯を忌んでゐるが、Cは子貢の言がうはすべりになることをたしなめたものであらう。「子貢問君子、子曰先行其言而後從之」もまた、子貢の性癖を慮つての言葉であらうことは諸家の注する通りと思ふ。Gは貨殖のことであるが、これは後に詳述する。Hは人を比較することが好きであつたこと。これについては、また、「師(子張)と商(子夏)と孰れか賢れる」の間が子貢にあることも考へ合せられる。方人は知者にありがちの性癖であるし、貨殖は知を當世に用ゐたものといへよう。Iの文はこの後に、孔子の偉大さは隔絶してゐるために、かへつて分り難いのであるといふ子貢の孔子禮讚の言が續くのであるが、世評の一部にかういふ説があつたものと思ふ。幸我が齊に用ゐられたらしい事と考へ合せても、言語の能力は、爲政者の側からは、きはめて有用の才として評價を受けたであらうことが推知されるのである。

『論語』の記述はなかには孔門の孫弟子より更に後代の記述を含む様ではあるが、それでも最も原始的基本的な子貢像は、この論語によ

つて知ることが出来るわけである。そしてこれが事實としての子貢の姿に最も近いものであらう。

戰國中期の儒家である『孟子』の書には、子貢について述べる所が都合三箇所あるが、公孫丑上篇の二箇所には『論語』に見えるのと同様、孔子尊崇者としての子貢が描かれてゐる、また、滕文公上篇には、孔子の死に際し、弟子の中心として葬儀をとりしきり、三年の心喪を行ひ、更に三年、墓所に廬を造つて過した子貢の話を載せる。これは孔子世家にも採用されてゐる。以上の通り『論語』『孟子』に見られる子貢は、孔子から教を引出すすぐれた聴き手であり、知、言語にたけた、當世の才ある、おそらく一般にも弟子間にも聲望のあつた高弟であり、孔子の偉大さを語る使徒的存在といへよう。このうち孔子への質問者としての子貢は、後の説話にも變らず見られるが、往々にして單なる問答相手であつて、精彩を缺いたものが多い。

〔二〕

前漢武帝期の『史記』では、子貢は仲尼弟子列傳、貨殖傳に記述がある。まづ、仲尼弟子傳の記述であるが、「子貢、利口巧辭、孔子常黜其辯」と説き起し、他の弟子と同様に論語に見える言葉を並べることが、主として外交に活躍した子貢の行跡を述べてゐて、この點は他の弟子の記述と大いに異なる面がある。子貢は、齊・吳・晉に出かけて、口舌によつて魯を救つた如く描かれてゐるが、その姿はあたかも縦横家の如き趣がある。これらは、今見るところの『左傳』、前漢に

於る『左氏春秋』等に描かれた姿を擴大したものであらう。司馬遷は「子貢一出、存魯亂齊、破吳彊晉、而霸越。子貢一使、使勢相破、十年之中、五國各有變」と述べてをり、子貢を語るときにこれらの業績を重視したわけである。

外交に活躍する子貢については、『墨子』の非儒篇『韓非子』の五蠹篇にその記述が見えるが、これらは儒家に對立する思想であるから、『墨子』では、多くの殺戮が起つたこと『韓非』では「子貢の辯智にして魯削らる」と述べて、その辯智を否定的に扱つてゐる。『淮南子』は先秦よりの傳承を整理する意味合があるが、人間訓では呉に使用する子貢の話が載つてゐて、「子貢、説く所以を知ると謂ふ可し」と評してゐる。しかし同時に、顔回の仁人、子路の勇人とともに子貢を辯人であると定めて、その子貢の辭が役に立たぬ話も載せてゐる。

この弟子傳の縦横家的子貢の事績に對しては、梁玉繩や崔述が既に疑つて虚誕の事としてゐるが、それは正しいであらう。ただ、魯のために齊に使用する事はあり得たであらう。

仲尼弟子傳の末には更に「子貢好廢舉、與時轉貨貨、常相魯衛、家累千金、卒終于齊」といふ記述があり、この點は貨殖傳にも載せる。

子貢既學於仲尼、退而仕於衛、廢著鬻財於曹魯之間、七十子之徒、賜最爲饒益。原憲不厭糟糠、匿於窮巷、子貢結駟連騎、束帛之幣以聘享諸侯、所至國君無不分庭與之抗禮。夫使孔子名布揚於天下者、子貢先後之也。此所謂得執而益彰者乎。

「かつて魯衛に相たり」については、中井積徳が「恐訛傳」とい

子貢像の變遷(宇野)

ひ、梁玉繩が「此事無放、與稱孔子相魯同、蓋子貢仕于魯衛也」と注する通りであらう。梁の云ふ如く「魯衛に仕へる」くらゐの事は、事實としてあり得たであらう。貨殖を爲した事については、先述の論語のGの文にも述べられてをり、その結果として「七十子の徒、賜、最も饒益と爲す」との記述も、確かにその事實があつたものと想像される。だが、「子貢、駟を結び騎を連ね」以下「國君分庭抗禮」までの記述は、その外交活動や衛に相たることを疑ふのと同様に誇張されたものと考へられる。

子貢が商賈の事を爲した、或は富を得たことを暗示させる傳承も存在する。例へば、『論語』子罕篇「子貢曰、有美玉於斯、韞匱而藏諸。求善賈而沽諸」の問は、朱注によれば孔子の出仕を譬へたものであるが、商賈的發想法であるといへよう。『荀子』法行篇「子貢問於孔子曰、君子之所以貴玉而賤珉者何也。爲夫玉之少而珉之多邪。」(これは禮記、聘義にも見える)も同様である。彼が富者であつた事をおもはせる話には、『呂氏春秋』察微篇「魯國之法、魯人爲人臣妾於諸侯、有能贖之者、取其金於府。子貢贖魯人於諸侯、來、而讓不取其金。」があるが、この話はまた『淮南子』齊俗訓・道應訓にも見える。

以上は要するに元來の子貢が有した言語と貨殖の才能が次第に説話化され、『史記』に至つてきはめて誇張されて外交の場における辯者とか、極端な富豪、富によつて名聲を得た姿として表現されてゐることを指摘したかつたのであるが、これは無論、司馬遷の恣意的憶斷などではなくて、當時の人々がこの様な點に注目した、その子貢觀を反

映したものであらうことは、後述することからも察せられると思ふ。

〔三〕

さて、子貢はまた弟子傳中の原憲の條にも登場してゐて、子貢の富裕が原憲の貧困に對置され、原憲のひきたて役にされてゐる。

孔子卒、原憲遂亡在草澤中、子貢相衛、而結駟連騎、排藜藿入窮閭、過謝原憲、憲攝敝衣冠見子貢。子貢恥之曰、夫子豈病乎、原憲曰、吾聞之、無財者謂之貧、學道而不能行者謂之病、若憲貧也、非病也。子貢慙、不憚而去、終身恥其言之過也。

この説話は『莊子』讓王篇。『韓詩外傳』卷一。『新序』雜事篇にも見え、その他にも、原憲と子貢とを對比的に述べることは、『列子』楊朱篇や、『鹽鐵論』などにも見えてをり、漢代では一般的な話柄であつたことが知られるのである。先の貨殖傳中にも「原憲不厭糟糠、匿於窮巷」の語が、前後と無關係に挿入されてゐるが、單なる錯簡でなければ、或は原憲と子貢との強い結びつきの故に史遷の筆がすべつたものであらうか。

『史記』の記述は、先行の資料と考へられる『莊子』や『韓詩外傳』にただちに依つたとはいへない。それは文章の細部が多少異なるので分るが、司馬遷は幾分子貢に同情的に描いてある。『莊子』と『韓詩外傳』とは強い關係が認められ、『莊子』に見える連續する二つの話を一つにまとめたものであらうことは推察に難くない。

○原憲居魯、環堵之室、茨以生草、蓬戸不完、桑以爲樞、而甕牖二室、

四

褐以爲塞、上漏下濕、匡坐而弦。子貢乘大馬、中紺而表素、軒車不容巷、往見原憲、原憲華冠纒履、杖藜而應門。子貢曰、噫、先生何病。原憲應之曰、憲聞之、無財謂之貧、學而不能行謂之病、今憲貧也、非病也。子貢逡巡而有愧色。原憲笑曰、夫希世而行、比周而友、學以爲人、教以爲己、仁義之廢。輿馬之飾、憲不忍爲也。

會子居衛、縵袍無表、顔色腫噲。手足胼胝。三日不舉火、十年不製衣、正冠而纒絕、捉衿而肘見、納履而踵決、曳纒而歌商頌、聲滿天地、若出金石、天子不得臣、諸侯不得友、故養志者忘形、養形者忘利、致道者忘心矣。

〔『莊子』讓王篇〕

○原憲居魯、環堵之室、茨以蒿萊、蓬戸甕牖、桶桑而無樞、上漏下濕、匡坐而絃歌、子貢乘肥馬、衣輕裘、中紺而表素、軒不容巷、而往見之、原憲楮冠黎杖而應門、正冠則纒絕、振襟則肘見、納履則踵決、子貢曰、噫先生何病也、原憲仰而應之曰、憲聞之、無財之謂貧、學而不能行之謂病、憲貧也、非病也。若夫希世而行、比周而友、學以爲人、教以爲己、仁義之匪、車馬之飾、衣裘之麗、憲不忍爲之也。子貢逡巡、面有慙色、不辭而去、原憲乃徐步曳杖、歌商頌而反、聲淪於天地、如出金石、天子不得而臣也、諸侯不得而友也、故養身者忘家、養志者忘身、身且不愛、孰能忝之、詩曰、我心匪石、不可轉也、我心匪席、不可卷也。

〔『韓詩外傳』〕

『莊子』にはこの原憲・會子の話の後に顔回が家貧しくしてなほ仕へる意志なく、道を樂しむことを、孔子が善しとする話があり、これらの三話で、仕官を拒否し隱逸を樂しむ事を述べてゐる。すなはち、名

利を離れて精神の自由を得ることを主張してゐる。

『韓詩外傳』は、曾子が術に居るのは不自然と考へたのか、初めの部分を削除し、残りをすべて原意の行爲の中に適宜挿入して一つの話に再構成してゐる。そしてその結語を變へて主題を志操といふことに置いてゐる。『論語』に「士、道に志して惡衣惡食を恥づる者は、未だ與に議るに足らず」と云ふから、韓嬰は儒家的立場から、志操を主題として述べたものであらう。ただ、「聲、天地に満ちて、金石より出づるが若し」などといふ表現は、心身の壯強乃至は道家的な自然との一體觀を示すもので、韓嬰の主題とは多少離れるから、構成の失敗といへるであらう。『韓詩外傳』の著者、韓嬰は詩・易を傳へたといひ、文帝のときの博士となり、景帝のとき常山大傳に至つたといふが、『韓詩外傳』に出づるこの類の話を見ると、なほ燕出身の地方儒者的な感懐を抱くことが感ぜられる。

以上の如く、この話は道家者流の虚構より生じたものであらうが、發想のもととなつたのは、『論語』の「憲問恥、子曰、邦有道、穀、邦無道穀恥也」（憲問篇）であらう。穀は食祿であるから、祿即ち仕官を拒否する態度は、裏面より云へば「邦に道が無い」といふ批判になるわけで、當時の貧困な士達に耳に入り易い話であつたはずである。

右のやうな名利を拒否して道に邁進するといふ類の話は、秦漢の際の説話に見られるものであるが、しばしば道家思想との結びつきが指摘できる。もつとも儒家と道家とでは、その道の内容、生の目的が異

なるのであるが、両者が互に影響し合つてゐることは、各方面から見て一つの思潮であることは云ふまでもない。

また、『荀子』脩身篇に「志意脩則驕富貴、道義重則輕王公、内省則外物輕矣。…士君子不爲貧愈乎道」と述べられてゐるが、これは戰國游説の士たちに見られる如き驕傲を肯定し、その條件として儒家の道義への歸依をいふものであらうが、原意子貢の話はこのやうな思想を具象化し物語としたものともいへる。子貢の人物像についても、『荀子』には大略篇に「子貢問於孔子曰、『賜倦於學矣、願息事君。孔子曰、…事君難、事君焉可息哉。然則賜願息事親、…』と、學問をやめて、仕官や親や妻子や朋友や、或は耕作に逃避を願ふ子貢が描かれ、早くも子貢を卑く視るものがある。

原意の説話に類する説話として、『韓詩外傳』卷二に見える次の話をとりあげてみよう。

関子鶯始見於夫子、有菜色、後有芻豢之色。子貢問曰、子始有菜色、今有芻豢之色何也。関子曰、吾出兼葭之中、入夫子之門。夫子内切磋以孝、外爲之陳王法、心竊樂之。出見羽蓋龍旂旃相隨、心又樂之。二者相攻胸中、而不能任。是以有菜色也。今被夫子之文變深、又頼二三子切磋而進之。内明於去就之義、出見羽蓋龍旂旃相隨、視之如壇土矣。是以有芻豢之色。詩曰、如切如磋、如琢如磨。この話も學問に切磋することによつて心身の安定が得られることをいふ儒家流思想であるわけであるが、主張點は別として、構成や表現の上から見たところでは、この話も系譜をたどることが出来る。それは

『韓非子』喻老篇に見える左の説である。

子夏見曾子、曾子曰何肥也。對曰、戰勝故肥也。曾子曰、何謂也。

子夏曰、吾入見先王之義則榮之、出見富貴之樂又榮之、兩者戰於胸中、未知勝負、故臞。今先王之義勝、故肥。是以志之難也、不在勝人、在自勝也。故曰、自勝之謂強。

これは、無論、老子に見える「強」の概念を韓非流に解説したものである。

『老子』三十三章には「知人者智、自知者明、勝人者有力、自勝者強、知足者富、強行者有志。」とあり、智よりは明、有力よりは強の方が、高位の概念とみなし得るから、人を知るより自己を知る、人に勝つより自己に勝つことを、眞の道であるとするのであらう、『韓非』は、子夏、曾子、先王之義といった儒家の道具をかりて『老子』の強を解説した形になつてゐる。富貴の樂に勝つて先王之義に志すことを自勝とし、身體の肥ゆるを以て強と解するもの様である。⁽¹⁰⁾『韓非』の説く所の自勝は、儒家のいふ所の克己に等しいやうである。初期の儒家は克己復禮を仁とはいふが、強とはいはない。克己を強の内實として意識することは道家の發想から始まるのではないか。ただ、『中庸』(章句十章)には子路が強を問ふ條があり、孔子は南方之強と北方之強とを區別した上で、南方の強を君子の強とし「寬柔以教、不報無道」と述べる。『老子』五十二章の「守柔曰強」の觀念と共通性がある様にも思へるが、また儒家本來の思想と見なす説も有力である。⁽¹¹⁾これが強の概念の説明として展開されることは、新たなことであつて、

道家的發想が影響してゐるのではないかと疑はれるわけである。『中庸』は續いて「君子和而不流」「中立而不倚」「國有道不變塞」「國無道、至死不變」の四項を強の内容として述べてゐる。これらは對外的力をいふのでなく、内省的方面から強を説いてゐる。内省は儒家本來の修身の基本(『論語』の克己、三省、内省、自省、『孟子』の性善)であることはいふまでもないが、それを展開させて、内省の内容について考慮したものといへよう。しかしこれもまた内觀的方面を高度のものとして考へる『老子』との共通性を見てとれるのである。⁽¹²⁾

「國有道不變塞」の塞は難解である。鄭玄は充塞の意にとり、朱子は未達ととるが、赤塚忠博士は塞の假借と解し、「志操の意まで高められたものと見てもよい」と述べてゐる。⁽¹³⁾

結局、原憲と子路との説話は、原憲の志操或は強に對して、子貢が世俗の榮譽に心奪はれた反價値的人物として描かれてゐるわけである。

原憲は、『莊子』、『韓詩外傳』では強者として、同情を以て描かれ、支持されてゐるのであるが、『史記』は、確かにこの話が原憲の行狀の中に示されてはゐるものの、游侠傳の冒頭では「及若季次・原憲、閭巷人也、讀書懷獨行君子之德、義不苟合當世、當世亦笑之、原憲、終身空室蓬戸、褐衣疏食不厭、死而已四百餘年、而弟子志之不倦」と述べ、また「誠使鄉曲之俠、予(＝與)季次原憲、比權量力、効功於當世、不同日而論矣」。といつて、當世に影響力を行使した點では原憲は游侠より下であるといつてゐる。「貨殖傳で子貢が賞讃されてゐる

るのを考へ合せると、司馬遷の同情はどちらかといふと子貢的な生き方の方にあるやうである。

〔四〕

游俠傳では原憲の生き方について、弟子が誌して倦まぬといふが、また、當世はそれを笑つたとも記してゐる。原憲を是とし子貢を非とするか、子貢を是とし原憲を非とするか、この對立が顯著に出てゐるのが『鹽鐵論』であらう。『鹽鐵論』は、丞相車千秋、御史桑弘羊、その屬僚と賢良・文學六十餘名との論争、これは昭帝の始元六年（前八一年）のことであつたが、それを後に議論の失はれるのを惜んで桓寛が編纂したものとされる。内容は經濟を中心とする政治一般についての議論であるがその内容はさておき、議論のうちに賢良や文學といふ地方知識人と、中央政府高官との意識や視野の相違が見られるのである。

今、その議論の激しさと視點の相違とを示す例を示さう。孝養篇での文學と丞相の史との對決である。その一部を抜書する。

文學「今子不聽正義以輔卿相、又從而順之、好須臾之說、不計其後、若子之爲人吏、宜受上戮、子姑默矣」
丞相史「身修然後可以理家、家治然後可以治官、故飯蔬糲者不可以言孝、妻子饑寒者不可以言慈、緒業不備不可以言理、居斯世、行斯身、而有三累者、斯亦足以默矣」

文學「居家理者、非謂積財也、事親孝者、非謂鮮肴也、亦和顔色、承

子貢像の變遷(宇野)

意、盡禮義而已矣」。

丞相史「禮無虛加、故必有其實然後爲之父子。與其禮有餘而養不足、寧養有餘而禮不足。」

互に「だまれ」「だまれ」と激く論難してゐるが、文學は禮儀を主張し道德的側面を攻撃し、丞相史は酒肉の養なき精神主義の孝を否定し、賢良文學の經濟狀態の貧困を當人の責任として攻撃するのである。

地廣篇では大夫と文學がかう述べる。

大夫「居下而訕上、處貧而非富：夫祿不過秉握者不足以言治、：儒皆貧窮、衣冠不完、安知國家之政、縣官之事乎」。

文學「夫賤不害智、貧不妨行、顏淵屢空、不爲不賢、：惟仁者能處約樂貧、小人富斯暴貧斯濫矣、楊子曰『爲仁不富、爲富不仁』苟先利而後義、取奪不厭、公卿積億萬、大夫積千金、士積百金、利己并財以聚、百姓寒苦、流離於路、儒獨何以完其衣冠也」

下位の貧乏人の分際で國家の事など分らうかと大夫が云へば、文學は、貧賤と知行とは關係がない、上位者が私利を迫り求め、仁ならざるために、百姓が苦しむ、我々儒だけがぬくぬくとしてをられようかと應酬するのである。「楊子曰」は『孟子』滕文公上に「陽虎曰、爲富不仁矣、爲仁不富矣」とあるのを指すのだが、『孟子』では國君が徵税して富むのは不仁とする公の問題であるが、『鹽鐵論』の議論では、私の倫理として、富と仁との對立を語つてゐる。

貧富篇では、大夫が自分は十三歳より仕へて儉節に努め、奉祿をもとに一々計り考へて富を致したのだと辯明し、「子貢之三至千金、豈

必頼之民哉、運之方寸、轉之息耗、取之貴賤之閒耳」と述べれば、文學はまた、古は利と祿を兼ねなかつたから貧富が懸隔しなかつた、今權勢に因つて利を求めるとは何事かと詰り「子貢以布衣致之、而孔子非之、況以勢位求之者乎」といふ。大夫は國家經營の觀點から鹽鐵酒權などの収入を是とする立場であり、個人の富についても何の罪惡感ももたない、智者は富み、愚者は困しむことは當然の法則と考へてゐる。對して文學などの地方知識人には、中央高官、或は富豪に對する怨嗟、或は蔑視といふ感情があつて、富と仁とは相容れぬとしてゐる。そのやうな對立の中で兩者にとつて最も評價の分れる人物として子貢は話題となつてゐるのである。貧富篇には、もう一度子貢が語られてゐる。

大夫「子貢以著積顯於諸侯、…上自人君、下及布衣之士、莫不戴其德稱其仁。原憲、孔伋、當世被饑寒之患、顏回屢空於窮巷。」

文學「君子求義、非苟富也、故刺子貢不受命而貨殖焉。…原憲之繻袍賢於季孫之狐貉。」

ここに子貢と共に原憲が語られてゐるが、先述した子貢と原憲の説話などから由來するところの對照が、當時の人々の頭に焼きついてゐたのであらう。子貢の評價は、このやうに立場の相違によつて大きく分れるのであるが、大夫側には認された子貢像は、やがて大夫と同然の發言をする姿となる。即ち、『新序』卷七節士には次の如き説話がある。

鮑焦衣弊膚見、潔奮將蔬、遇子贛於道。子贛曰、吾子何以至此也。

焦曰、天下之遺德教者衆矣。吾何以不至於此也。吾聞之、世不已知、而行之不已者、是爽行也。上不已知、而干之不止者、是毀廉也。行爽廉毀、然且不舎、惑於利者也。子贛曰、吾聞之、非其世者、不生其利、汚其君者、不履其土。今吾子汚其君而履其土、非其世而將其蔬、此誰之有哉。鮑焦曰、嗚呼吾聞、賢者重進而輕退、廉者易醜而輕死。乃弃其蔬、而立槁死於洛水之上。君子聞之曰、廉夫剛哉、夫山銳則不高、水狹則不深、行特者其德不厚、志與天地疑者其爲人不祥、鮑子可謂不祥矣。其節度淺深、適至而止矣。詩曰、已焉哉、天實爲之、謂之何哉。

また所謂弟子、儒者の側からの子貢の評價は、論語のそれとは違つてきて、漢代を通じて餘り芳しくない。『莊子』、『韓詩外傳』に見える原憲の強と對置された子貢像は、『鹽鐵論』に見るやうな地方儒者達によつて語られたものであらうし、そのやうな儒者は漢の初期から結構多く存在したものだと思はれる。『說苑』雜言篇の「孔子曰、吾死之後、商也日益、賜也日損。商也好與賢己者處、賜也好說不若己者」も、おそらくは、この様な漢代の儒によつて語られたところの子貢評價なのであらう。

〔五〕

『論語』先進篇の「子曰、同也其庶乎、屢空。賜不受命、而貨殖焉億則屢中」の解釋は様々な説があつて難解である。まづ「庶乎」は「近」と訓ずるとして、一體何に近いのか。古注は「庶幾聖道」。朱

子は「近道」。荻生徂徠は「言其必受命而興也」として、天命を受けて南面するに近しととる。「屢空」については、古注の一曰は、虚中、心中が虚なることとするが、古注・新注とも空匿と解する。「不受命」の命は、古注は教命といひ、朱子は天命といふ。教命は孔子の教の意であらう。他に王弼は爵命といひ、焦循は祿命と解する。祿命は、富を得べき命の意と仕官して祿を受ける意と両様に解せる。「貨殖」については古注は「財貨是殖」、朱子は「貨財生殖」といふが、その實體はどういふものであつたのか。已に見た如く、貨殖傳では「廢著鬻財於曹魯之間」といひ、前漢說話では王侯のやうな姿で、千金を積んだ大富豪といふわけだが、崔述は、「所謂貨殖云者、不過留心於家人生産、酌盈劑虚、使不至困乏耳、非糶賤販貴若商賈所爲也。樊遲請學稼圃、孔子以小人斥之、若子貢學道而躬行商賈之、孔子不知當如何斥之何以其辭僅如是而已乎。」(洙泗考信餘錄卷一)と疑問を投じてゐる。「億則屢中」について、古注は「億度是非」或は「雖不窮理而幸中、雖非天命而偶富、亦所以不虚心也」といひ、朱子は「能料事而多中」と注するが、先進篇、閔子騫に對する孔子の評「子曰、夫人不言、言必有中」の解釋で、「言不妄發、發必當理」といふのを参照すると、中は、理にあたる、と考へてゐるやうである。伊藤仁齋は、朱子を襲つて、「中、謂中理也、言其才識亦能料事而多中也」といつてゐる。皇侃の疏では左傳定公十五年の子貢が邾隱公と魯定公の玉の執り方を見て、その死亡するであらうことを言ひあてたことについて、孔子が「賜不幸而言中」といつてゐるのを擧げて、これが憶中の類であるといふ。

子貢像の變遷(宇野)

徂徠は「億則屢中、喜用其智也」と注するが、閔子騫の言中に關しては、言に驗あることを中といふのだと述べ、閔子の言中も魯の長府が後に火災で焼失したのであらうといふ憶説を述べてゐる。

以上、解釋は一樣ではないのであるが、漢代の一般的解釋は既に述べた『鹽鐵論』の記述などから、知り得るやうである。顏回の箇所は今措いて、子貢について考へると、この條は孔子が子貢をきはめて批難した言葉として漢代は解されてゐて、古注の云ふ、回をほめて賜を勵ましたとか、朱子の解釋、「不受命」は短所であるが、「億則屢中」は子貢の美點と解し、一方的にそしつたことは解されないのと、受取方に相違があるやうである。『鹽鐵論』貧富篇は「子貢以布衣致之、而孔子非之」また「孔子云、富而可求、雖執鞭之事吾亦爲之、如不可求、從吾所好、君子求義、非苟富也。故刺子貢不受命而貨殖焉。」と述べて、不受命而貨殖焉を苟富と考へてをり、孔子がこれをそしつたといつてゐる。ただ、憶中をどう解するのかわ不明である。

後漢、王充の『論衡』には率性篇、問孔篇、知實篇に記載がある。

○賜不受命、而貨殖焉。賜本不受天之富命、所加貨財積聚、爲世富人者、得貨殖之術也。(率性篇)

○孔子曰、賜不受命、而貨殖焉、億則屢中、何謂不受命乎。說曰、不受當富之命、自以術知、數億中時也。(問孔篇)

○孔子曰、賜不受命、而貨殖焉、億則屢中、罪子貢善居積、意貴賤之期、數得其時、故貨殖多、富比陶朱。(知實篇)

これによれば、命は、天の富命。當に富むべき命、と述べられて

ある。天命とか祿命とほぼ同じとならう。そして、億中は中時、即ち、物價の貴賤の時期を意ひ計つて、術知によつて、頃合をあてたといふ意に解されてをり、つまり、不受命から億中まで一貫して貨殖のこととして讀んでゐる。また、貨殖によつて富が陶朱に比せられる様になつた子貢を、孔子が罪したのだと解釋するのであるが、王充の記載はすべて敍上の漢代の子貢像から發した解釋であると思はれる。そしてまた、この解釋は既に前漢代に成立してゐたのかも知れない。ただし、漢代の子貢像がすでに初期のものといふに異なることを見たのであるから、これから發した漢代の解釋が、孔子の眞意とはただちに云へぬのであつて、本來の發言の趣旨はまた自から別の檢討を要する。

注

- (1) 仲尼弟子傳、『孔子家語』弟子解に見える弟子の歳は全面的には信頼できないものだが、他に適正な資料も、また存在しない。此處は顔回と子貢とが比較されてゐる(子謂子貢曰、女與回也孰愈—公治長など)ことから、年齢的にも接近するのであらうと推測される。なほ、蘇振申『史記仲尼弟子列傳疏證』に考證詳らから。
- (2) 渡邊卓『古代中國思想の研究』個々の弟子説話、子貢(二六一—二八七頁)は、論語を中心とする考察。未完。佐藤一郎「論語における子貢研究」—古代哲學の成立と商業的思維—北海道大學文學部紀要十四—一(昭和四十年十一月)
- (3) 他の弟子の登場回数を参考までにあけておくと、子路は四十一章、顔回は二十一章、子夏二十章、子張十八章、曾子十五章、子游八章とつづく。
- (4) この點に關しては、津田左右吉『論語と孔子の思想』和辻哲郎『孔子』

- (植村書店)にも先進篇末章の虚構性を論ずる。渡邊卓、前掲書。木村英一「論語と孔子」二四一頁は穩健な論。
- (5) 梁玉細『史記志疑』卷二十八。崔述『洙泗考信餘錄』卷一。
- (6) 中井積徳説は『史記會注考證』所引。梁玉細『史記志疑』卷二十八。
- (7) 渡邊卓、前掲書は事實の糾明に感しいが、「相の地位に在つたことは疑わしいにしても、魯衛において高級官人であつたことまで疑う必要はない。」といふ。
- (8) 『史記志疑』卷二十八。「孫侍講曰、…因論語有貨殖之言、故謂其好慶舉轉貨、並列之貨殖傳、云子貢積蓄蓄財、最爲饒益、班漢仍史、是爲陶朱猗頓一流人。子貢聞性道傳一貫與顔會比、奈何以此誣之。史通雜説篇、困學紀聞七竝糾之矣。」古くから疑問視する説はあるが、みな子貢の純儒なるを以て疑ふ。本論はその純儒ゆゑに貨殖せずと考へるのではない。程度に誇張のある事を疑ふものである。また果して孔子はそれ程に貨殖を非としたであらうか。また、『洙泗考信餘錄』卷一など。
- (9) この紺色を襲に素すなはち白色を表にした衣服は、いかにも漢代の豪商などの姿の様に思はれる。
- (10) 上述の『莊子』『韓詩外傳』の原憲子貢の話の中で、原憲が自分は「貧ではあるが、病ではない」と答へてゐるが、非病はずなはち強といふことである。
- (11) 赤塚忠博士『大學中庸』新釋漢文大系、明治書院、二一七頁『尚書』皋陶謨篇に「寛にして栗、柔にして立」を徳としており、『荀子』にも「君子は寛にして優らず」「柔にして流れず」(不苟篇)といつてゐるように、寛柔は儒家の貴ぶところであり、その上に寛柔といふことは「寛くめぐみ民を柔らぐ」(齊語)といふことばのように、人を治めることから發達した徳であつて、老子の説く柔弱とは意味がちがう」と述べてゐる。
- (12) 『荀子』子道篇に左の説話が見える。
- 子路入。子曰、由、知者若何、仁者若何。子路對曰、知者使人知己、仁者使人愛己。子曰、可謂士矣。子貢入。子曰、賜、知者若何、仁者若何。

子貢對曰、知者知人、仁者愛人。子曰、可謂士君子矣。顏淵入。子曰、同、知者若何、仁者若何。顏淵對曰、知者自知、仁者自愛。子曰、可謂明君子矣。

この説話は次の二點の特徴を見てとれる。

一、子路・子貢・顔回を比較して序列化し、顔回を最もすぐれるとし、子貢、子路の順に評價を定めてゐる。二、子路、子貢の二者の答は自己と他人との關はりの中で、すなはち人倫に於て、知仁の徳目を考へてをり、これは原初的儒家の徳目の考へ方の範圍内である。それに對し、顔回の答は徳目の内觀化と稱すべきものがあつて、先述の「内省すれば外物輕し」といつた思考である。無論、内觀化されたものが價值が高いとする立場である。なほ、序列化の説話では『韓詩外傳』卷七「孔子游於景山之上、子路子貢顔淵從之」。同様の話『說苑』指武篇など。

(13) 『大學中庸』明治書院二一八頁。

(14) 西田太一郎「儒家法家と武帝の統制政策」東洋の文化と社會三輯、日原利國「鹽鐵論の思想史的研究」東洋の文化と社會四輯所收。鹽鐵論の思想内容を整理したもの。

(15) 『論語』の四科は德行、言語、政事、文學の順であるが、『史記』弟子傳、『鹽鐵論』殊路篇では政事、言語の順に並べられてゐる。漢代では言語が所謂辯と受取られ、政事より低位の價值とみなされたのであらうか。餘談にわたるが、德行の順は、『孟子』では冉牛、閔子、顔淵となつてゐるのは、年の順であるらしい。(冉牛の年齢は不詳だが、『聖内志』には孔子より少きこと七歳といふ。蘇振申『疏證』所引。閔子は少孔子十五歳、顔回、少孔子三十歳)『論語』に顔回が筆頭になつてゐるのは、顔回の評價の高くなつた故であらう。四科十哲を孔子の言とするのは違ふであらう。世人か弟子間の弟子評であると思ふ。なほ、『孟子』公孫丑上の「幸我子貢善爲說辭、冉牛閔子顔淵善言德行」と「德行を言ふ」とか、また、幸我子貢が德行より先に述べられてゐるのは孟子のここの議論の必要上である。

(16) 其庶乎は『易』繫辭下傳に「顔氏之子、其庶幾乎」の語が見える。注で子貢像の變遷(宇野)

はこれを幾を知るに近いと解してゐる。王弼はこれを以て『論語』を解してゐる。知幾は聖人であるから、聖人に近いの釋義も生じよう。またしかし、『易』の文も庶幾を近と訓じてもよい様に思ふ。「屢空」については、みな貧の表現となつてゐるから空匪の解釋と等しかつたであらう。要するに後代の解釋と違ひはなかつたであらう。

(17) 黄暉『論衡校釋』により「不」字を加へる。

(昭和59・10誌)